

昆虫弁当

清水鱗造

灰皿町

彼は「五寸釘くん」とも呼ばれる。本名は虫晴五利むしはるごりというのだが、その漢字は少し読みにくいので、あだ名を覚えることになっているのは「五寸釘くん」と呼ぶようになってしまふ。なぜ「五寸釘」かという、痩せていて長い釘の印象があるからだ。本人はその呼ばれ方についてはあまり感想はない。

同じ町に住む夕霧ゆむちゃんも虫晴五利くんに出くわすと、五寸釘が水溜まりで錆びて赤くなっていたのを思い出してしまふ。畦道の向こうから虫晴くんが歩いてきて「おはよう」と言われると、妄想が浮かんだ後であるとしどろもどろの状態で「おはよう」と言ってしまう。五寸釘くんは、そんなときは夕霧ちゃんが自分に気があるのではないかと思う。いつも道で会うと、なにか考えながら不自然に笑ってあいさつするので、どうしたのかなと思う。

五寸釘くんは、夕霧ちゃんは女の子だが指導力と企画力があるとつねづね思っていた。実際、腕相撲が強いし、小学校の遠足の山登りでもへたばった五寸釘くんの背中を押して登ってくれたことがあった。しかし中学も後半になると、男性はそれなりに体力もついて背も高くなる。夕霧ちゃんが頼りになるような思いのみ残って流れている。

夕霧ちゃんは中学になると、男子たちとの距離が遠くなったような近くなったような変な感じがした。

ビヨン土町どちようは人口が少なくて駅も無人だし、一見寂れている印象だ。最寄りの駅は花はな忙いそがしという。しかし二両編成のローカル電車を降りると、わざと古めかしい外観で造つてある町並みがある。なんでこんなふうに造られたのか詳しくはわからないが「古いものを残したり、再現したりすると懐かしさが漂う」ということで、観光資源になるかもしれないとの思いから設計を推し進めたらしい。

駅前に商店街があるが、じつは必要な三軒を除いて模型なのだ。古風な食品店のように見えるスーパーマーケット、金物屋さん、駄菓子屋さんは普通の商売をしている。ほかにあるたとえばケーキ屋さんはケーキの精巧なフィギュアを並べてあるだけで、白い筒の帽子をかぶっている店員さんは静止した人形である。

五寸釘くんは、客観的に見て、五寸釘の形をした人間が金槌で板に打たれるという白日夢を半ば無意識に見ることはある。その一つはたとえば次のようなものだ。

夕方、家に向かつて家々の間の道を歩いていたときだ。暇だったので五寸釘くんは自分の妄想をワンシーンにまとめることにした。頭にヘルメットをかぶり、街路でのパフォーマンスとして「釘打ち」をしてみよう。実際に鉄でできていれば杭にでもなるが、肉体なので、釘を打つ人もじつは意味が不明なのだ。ただ五寸釘の形をしていることから、順序から言う和金槌で打たれるという成り行きになるというだけだ。打たれるほう

も打つほうも、ただ五寸釘の形をしていることにとらわれてしまっただけで強迫的に「釘打ち」の行為に及ぶのだ。しかし、肉体は壊れないように、釘の形をした肉体は打たれると沈みこむように軟らかいものに緩く入っていかなくてはならない。それに本物の金属ではまずくて、軟らかい材質のものを金属の光沢を出す色で塗った偽の金槌でなければ危ない。

夕霧ちゃんの五寸釘についての妄想と、対照してみることができる五寸釘くん自身の想像。そういう二人の妄想の要点が繋がったイメージが、なんらかのかたちで二人の関係に影響を与えないともいえないと思う。

ビヨン土町の男の小、中学生は、みんな角帽をかぶっている。黒い座布団形の帽子をかぶった小学生の放課後の遊びを見ると、初めて見た人は「何なんだ」と思うこともある。当初、町の保護者たちが目立つように子どもたちに何かかぶせたらどうだろうかというアイデアを出した。少し冗談。ぼく黒い生地で帽子の試作品を作ったら、彼らに爆発的に受けたのが予想外だった。試作品なので、冗談で上面が四角い帽子を作ったのだ。試作品を前にしてみんなでいろいろ検討しようということになっていたのに、試作品をかぶってみた子どもたちは角帽が大好きになって、強くこのデザインを推したのだ。

ビヨン土町には気ままに生活することを旨とする自由の気風にあふれていて、大人も子どももほとんど外出時にはTシャツと短パンを着けるのを好んでいる。格式張った式場などにもこれで出かけるのが普通である。でも子どもたちはほとんど角帽をかぶっているの、野原で遊んでいるのを遠くから見ているとおもしろい。カラフルなTシャツで走ったり転んだりして遊んでいるのだが、黒い角帽もばらばらと動いて同時に移動して見える。母親が、

「たまには角帽はかぶらないで学校に行ったら？」

と言っても「好きなんだよ」とみんな答えて頑としてかぶって学校に行く。小学校低学年の生徒たちは小さい角帽をかぶって、手をつないで道を歩いているので可愛い。絵本作家がさっそく絵筆をとって描きたくなるほどだと思う。

実際、すでに尻根温泉けつねにたまたま逗留していた童話作家が、花忙駅に止まった電車から角帽をかぶった小学生の一団を見かけて童話の材料に使ったらしい。尻根温泉は花忙から二つ目の蛭泉ひるいずみ駅からバスで二十分ほどのところにある。

この辺では、隣の幕足駅まくたりの近くの学校に通うために電車を使う生徒で賑わう。朝方と夕方は駅舎は子どもたちの声で包まれる。大人はほとんどネットワークを利用して在宅の仕事をしているので、電車はいつもそれほど混みあわない。蛇腹畑線じやばらばたには二両編成の

電車が走っている。

ビョン土町の住民は駅前なたたずまいを残したいと思っているので、観光資源にしたという町の思惑と重なって駅前の商店街も化石のように形だけ残った。本当は人口や仕事形態、流通からいって商店街は不要になってしまっていた。しかし人形で雰囲気表現したような商店の並びは観光客には意外に好評であったようで、尻根温泉に泊まってから観光で花忙駅で降りて作り物の商店を回る人も増えてきた。普通に町が残している古民家の風情を見にくる人から、近年は「商店街の殻」とも呼ばれる模型の駅前商店街もネットワークの紹介ページに書かれているので、訪ねる外国人までいて観光客数は徐々に増えている。

花忙は蛇腹畑線の終点だが、次の駅の幕足にビョン土町の教育設備がまとめて造られているので花忙駅の近くには運動場があるくらいで学校はない。しかし山の間の平地や林などは、遊び場としてよく整備されている。駅名の「花忙」からわかるように、花卉かきの生産地でもある。

童話作家が書いた、角帽の子どもが出てくる童話『ボンちゃん、村の学校に入る』の最初の部分は次のようである。